

第二言語としての日本語の副詞習得に関する研究の概観及び今後の展望

胡 娜

An Overview of Research into L2 Acquisition of Japanese Adverbs and Future Prospects

HU NA

Abstract

The purpose of this paper is to examine the existing academic literature on the acquisition by non-native speakers of Japanese adverbs, with particular attention paid to the survey methodology and results, as well as charting the direction of future research on adverb acquisition. With this in mind, this paper begins with a discussion of the literature on the acquisition of Japanese adverbs by native speakers, following by an examination of literature on acquisition by non-native speakers, organized according to the various methods applied. There are three such methods, namely research informed by linguistics, research informed by data gathered from learners, and research which is informed by analysis of classroom texts. In this paper, the results of each research approach is described, with an emphasis on elucidating what factors effect learners' acquisition of adverbs. This is followed by an examination of the recent flourishing of research on modal adverbs. Finally, the author poses the question of whether research examining the acquisition of adverbs might benefit from centering that research around the perspective of interlanguage, or applying greater efforts at building up empirical evidence of the factors affecting acquisition.



目次

1. はじめに
2. 本稿で取り上げる副詞の定義および分類
3. 第一言語としての日本語の副詞習得研究
4. 第二言語としての日本語の副詞習得研究
 - 4.1 年代別に見た研究の特徴
 - 4.2 研究の焦点別に見た研究の特徴
 - 4.2.1 言語学的視点から見た副詞指導上の困難点
 - 4.2.2 学習者の習得状況

- 4.2.2.1 学習者の作文をデータとした研究
 - 4.2.2.2 その他の調査方法を利用した研究
 - 4.2.2.3 学習者の副詞習得に影響を与える要因
 - 4.2.3 教科書や辞典における副詞の扱い
- 4.3 日本語の陳述副詞習得に関する研究
 - 4.3.1 陳述副詞全体の使用傾向を考察した研究
 - 4.3.2 個別の陳述副詞の使用傾向を考察した研究
5. まとめと今後の課題
- 注・参考文献

1. はじめに

川口・佐々木(1996)の調査によると、日本語母語話者の作文において副詞の使用率は名詞、動詞に次いで多いという。使用数が多い一方、日本語の副詞には類義語や多義語が多く、特に陳述副詞のような話し手の心的態度として捉える副詞は、客観的記述が難しく、使用上様々な制限を有するものが多い(大関1993)と言える。そのため、副詞の学習は決して容易とは言えない。しかし、日本語教育現場においては、動詞、形容詞などの品詞に比べ、形態上活用せず、構文上、必須な成分ではない副詞を取り立てて指導する機会が少ないのが現状であろう。また、実際日本語教科書を見ても、副詞に関する説明や解釈の部分は非常に少ないようである。日本語教育現場で積極的に副詞を取り扱わないのは、日本語の副詞自身が持つ意味的な複雑さや構文上の制限などが原因の一つとして考えられるが、日本語の副詞の習得に関する研究が進んでいないという理由もあろう。「研究(特に教育の現場に応用できる形での研究)が進んでいないのは、むしろそれについての関心が薄かった証拠でもある」と田中(1983)は指摘している。そこで、筆者は80年代から行われてきた「日本語の副詞習得研究」を概観し、これまでの研究の視座の変遷及び各々の研究成果の内容分析から、それらの特徴を探り、今後の展望について述べることを本稿の目的とする。

まず、第2章では本稿で取り上げる副詞の定義とそ

の分類について述べる。第3章では、日本語母語話者の副詞習得過程を究明する研究を紹介する。第4章では第二言語としての日本語学習者の副詞習得研究を概観する。具体的にはまず年代別に研究の特徴を見て、研究の全体像を把握する。そして、研究の焦点別と研究方法別に陳述副詞以外の副詞習得研究を詳しく検討する。最後に、陳述副詞の習得に関する一連の研究を見る。第5章ではこれらの研究成果を踏まえ、第二言語としての日本語の副詞習得研究の今後の課題と展望について述べる。

2. 本稿で取り上げる副詞の定義および分類

浅田(2007)が指摘しているように「『副詞とは何か』に関しては、副詞の分類を含め、これまで多くの研究者によって論じられているにも関わらず、いまだに一定していない」というのが現状である。そのため、これまでの研究における副詞の定義にも多少異なる部分がある。本稿においては、「ゆっくり歩く」、「ずいぶん静かだ」のような「そのままの形で、主として、用言を修飾して、連用修飾になる単語」(市川1976)を副詞とし、論を進める。また、副詞の分類方法も諸説分かれているため、ここではいくつかの分類方法を紹介するが、第3、4章で各論文をレビューする際には、各論文の分類方法や名称に従うこととする。

副詞は一般的に、「状態副詞」、「程度副詞」、「陳述副詞」の3つに分けられている。この三分類に基づき

さらに細かく分類すると、市川（1976）の「状態の副詞」「程度の副詞」「陳述の副詞」「評価の副詞」「限定の副詞」、芳賀（1978）の「情態の副詞」「程度の副詞」「呼応の副詞」「注釈の副詞」「承前副詞」、仁田（1983）の「結果の副詞」「様態の副詞」「評価づけの副詞」「主体めあての副詞」「程度性の副詞」「数量の副詞」「時間関係の副詞」「頻度の副詞」、田窪・益岡（1992）の「様態の副詞」「程度副詞」「量の副詞」「テンス・アスペクトの副詞」「文修飾副詞」、川口・佐々木（1996）の「状態副詞」「程度副詞」「時数副詞」「陳述副詞」など、様々な分類がなされている。以後取り上げる先行研究の中で、従来の「陳述副詞」に相当するものは「誘導副詞」（中島 2017）とも呼ばれている。その名称はそれぞれの論文に従う。

3. 第一言語としての日本語の副詞習得研究

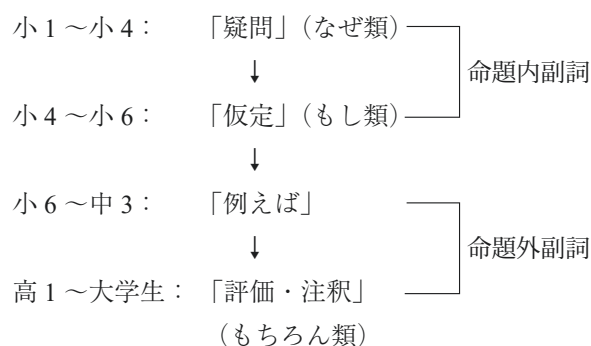
第二言語としての副詞の習得研究を検討する前に、本章では第一言語としての副詞の習得過程を究明した研究を概観する。

川口・佐々木（1996）は、小学校1年から大学まで、合計480名の日本語母語話者の児童・生徒・学生に同じ題名で作文を書かせ、その作文を分析することによって、副詞の習得過程を縦断的に捉えようとしたのである。日本語母語話者の習得過程を主眼としているが、比較群として、40名の日本語学習者に対して同様の調査を行った。川口・佐々木は、副詞を「状態副詞」、「時数副詞」、「程度副詞」、「陳述副詞」の4つに分類し、「状態副詞」「陳述副詞」に絞って、副詞の発達過程また副詞を用いた叙述の仕方の発達過程を調べた。

まず、状態副詞の中のオノマトペを取り上げ、学年別に使用傾向を分析した。その結果、日本語母語話者の場合、重なっている時期もあるものの、「オノマトペを多用する段階」から「オノマトペを避け、オノマトペを使わない表現をする段階」へ、そして、「文体意識の現れとして効果的にオノマトペを使おうとする段階」へという発達過程があるのではないかと推論し

ている。一方、日本語学習者のオノマトペの使用は日本人と比べて少ないという傾向も示している。

陳述副詞については、(1)「断定強意」(2)「推量」(3)「打ち消し」(4)「疑問」(5)「仮定」(6)「比況」(7)「譲歩」(8)「感嘆」(9)「願望」(10)「限定」(11)「評価・注釈」の11の下位項目を設定した。考察の結果、日本語母語話者の使用において、(1)～(9)の呼応を持つ副詞のほうが(10)、(11)の呼応を持たない副詞よりもその使用は早く、容易であると指摘している。さらに、陳述副詞の習得過程に関して、次のような使用傾向の推移が見られた。



以上の結果が、川口・佐々木は、「なぜ」類「もし」類という命題の内側にある「命題内副詞」から、「例えば」「もちろん、確かに、実は、いわば」という命題の外側にある「命題外副詞」へという習得過程を示しており、その習得過程が叙述内容（命題）に近い部分から遠い部分へと向かう様相が見られた（p. 236）。また、日本語学習者の使用に関しては、(11)「評価・注釈」の副詞は産出率が低かったため、ほかの陳述副詞より習得が遅くなると指摘している。

川口・佐々木（1996）から言えることは、日本語母語話者において文末形式等と呼応関係がある陳述副詞の使用には、ある一定の発達段階が見られたということである。日本語母語話者と日本語学習者の発達段階にはどのような相違があるのかが明らかになっていないため、第二言語としての副詞習得研究を行う必要性があると言えるのではないかと推論し

4. 第二言語としての日本語の副詞習得研究

本章では、第二言語学習者による副詞の習得研究を概観する。その際、まず 4.1 で年代順に先行研究を概観し、研究の全体的な状況を把握する。そして、4.2、4.3、4.4 では、副詞指導の困難点、学習者の習得、教科書における扱いという 3 つの視点から、それぞれに関連する研究の成果を考察する。

4.1 年代別に見た研究の特徴

ここでは学習者の副詞習得に関する研究の一覧を表 1 に載せ、どのような研究が行われたのか、具体的にどのような項目が調査されたのか、どのような調査手法を用い、どのような学習者を対象としたのかを全体的に把握する。

表 1 第二言語としての日本語の副詞習得に関する研究

| 研究 | 研究の焦点 | 調査副詞 | 調査対象 | 調査方法 |
|-------------------|---------------------|--------------------------------|--|---|
| 北條 (1982) | 副詞指導上の困難点 | 副詞の構文上の特徴 | 中級学習者用教科書 | テキストから副詞を抽出して分析 |
| 小矢野 (1984) | 副詞指導上の困難点 | 副用語（副詞、連体詞、接続詞、感動詞） | 該当機関で使用されている教科書 | テキストから副詞を抽出して分析 |
| 大関 (1993a) | 副詞指導上の困難点 | 命令・依頼・勧誘・意志、希望・当為を表す副詞 | 会話表現を文字化したものやシナリオ | 会話表現を文字化したものやシナリオから副詞を抽出して分析 |
| 大関 (1993b) | 教科書における扱い | 日本語教科書に現れる副詞 | 初級教科書 16 冊 中・上級教科書 8 冊 | テキストから副詞を抽出して分析 |
| 石黒 (2004) | 学習者の習得 | 漢語副詞 | 中国語母語話者 上級 | 466 の作文レポートから副詞を抽出して分析 |
| 王 (2004) | 副詞指導上の困難点 学習者の習得 | 日本語の陳述副詞「きっと」と中国語“一定” | 中国語母語話者 | 対照分析 自由産出テスト |
| 王 (2005a) | 副詞指導上の困難点 | 陳述副詞「きっと」 | 文学作品に現れる用例 | テキストから「きっと」の用例を抽出して分析 |
| 王 (2005b) | 学習者の習得 | 陳述副詞「きっと」「必ず」 | NS JFL：中国上級日本語学習 | 自由産出テスト 教科書・辞書調査 インタビュー |
| メニバイエヴァ (2005) | 学習者の習得 | 陳述副詞「きっと」「必ず」「ぜひ」 | ロシア語母語話者の日本語学習者 | 文法性判断テスト 選択式問題 文の翻訳 文のニュアンスの記述 |
| 王 (2006) | 学習者の習得 | 陳述副詞「きっと」 | NS：30 名 JFL：中国上級学習者 30 名、 中級学習者 30 名 | 自由産出テスト 受容度判断テスト 文の翻訳 |
| 浅田 (2007) | 学習者の習得 | 多義語副詞 | 異なる母語を持つ日本語学習者 | 作文データベースから副詞を抽出して分析 |
| 王 (2007) | 副詞指導上の困難点 | 陳述副詞「きっと」「必ず」 | 文学作品に出た用例 | 過去研究のまとめ |
| 浅田 (2008) | 学習者の習得 | 「よく」「ずっと」「もっと」「ゆっくり」「ちょっと」「まだ」 | JSL：28 人 JFL：大学 3 年生 67 名 中国語母語話者 | 学習者による文完成テスト |

| | | | | |
|--------------|-----------|-----------------------------------|---------------------------------------|---|
| 王 (2008) | 学習者の習得 | 陳述副詞「きっと」「必ず」 | NS: 30 名 JFL: 中国上級 30 名 中級 30 名 | 自由産出テスト 受容度判断テスト |
| 王 (2009) | 副詞指導上の困難点 | 日本語の陳述副詞「きっと」 「必ず」 中国語 “一定” | 文学作品に現れる用例 | テキストから用例を抽出して対照分析 |
| 張 (2009) | 学習者の習得 | 教科書から抽出した陳述副詞 | 中国語母語話者 135 名 | 選択式テスト 意識調査 |
| 劉 (2009) | 教科書における扱い | 日本語教科書に現れる副詞 | 『新編日語』 | テキストから副詞を抽出して分析 |
| 李 (2010) | 学習者の習得 | 初級、中級の副詞 20 語 | 中国母語話者 (JFL: 256 名) | 音声データから副詞を抽出して分析 フォローアップ・アンケート調査 |
| 李 (2011) | 学習者の習得 | 使用頻度の高い 15 語の陳述副詞 | 中国語母語話者 20 名 | 文作成テスト |
| 閻 (2013) | 学習者の習得 | 程度副詞 | 中国語母語話者 (JFL 初・中級学習者 60 名) | 学習者の作文から副詞を抽出して分析 選択式テスト |
| 王 (2014) | 学習者の習得 | 陳述副詞「必ず」 | NS: 60 名 JFL: 中国母語話者 82 名 | 受容度判断テスト |
| 林 (2015) | 学習者の習得 | 様態の副詞的修飾成分 | 中国語母語話者 | 日本語学習者の誤用コーパスから副詞を抽出して分析 |
| 劉 (2015) | 学習者の習得 | コーパスに現れる副詞 | 中国語母語話者 日本語教師 | 作文コーパスと作文対訳データベースから副詞を抽出して分析 フォローアップ・アンケート調査 |
| 伊藤 (2017) | 教科書における扱い | 日本語教科書に現れる副詞 | 『話す・書くにつながる! 日本語読解中級』 | テキストから副詞を抽出して分析 |
| 塚田 (2017) | 学習者の習得 | コーパスに現れる副詞 | 上級日本語学習者 日本語母語話者 | 作文コーパスから副詞を抽出して分析 |
| 中島 (2017) | 学習者の習得 | 陳述副詞「かならず」「きっと」「ぜひ」「たしか」「たしかに」 | 韓国語母語話者の日本語学習者 | 談話穴埋めテスト |
| 胡 (2018) | 学習者の習得 | 陳述副詞「きっと」「必ず」 | 中国語母語話者 97 名 (N1、N2 合格) | 学習者による短文作成と選択式テスト |
| 金 (2019) | 教科書における扱い | JLPT 向けの問題集に現れる副詞 | 韓国で出版された JLPT 向けの問題集 | テキストから副詞を抽出して分析 |

日本語の副詞習得研究は、80 年代から行われてきたが、当時の研究は習得研究というより言語学的な視点から副詞自体を研究するイメージが強い。副詞自体の構文的特徴や文単位での振る舞いの特徴を抽出することが中心で、学習者の副詞使用に言及するのではなく、指導上の注意点を提示するなどに留まっている。90 年代以降は、学習者の産出に焦点を当てた副詞の

習得研究が多くなった。その他、教科書での扱い、副詞の指導などに関しても研究されている。また、調査項目は副詞全体から漢語副詞、時制副詞、程度副詞、陳述副詞、さらに個別の副詞など研究の焦点を細分化し、学習者の習得に関わる要因をより精緻に探ろうとしている。中でも、対照分析研究及び認知言語学的視点から「きっと」「必ず」の習得状況を考察した王(2004、

2005a、2005b、2006、2007、2008、2009、2014)の一連の研究は、様々な調査方法を用いて学習者の習得状況を総合的に考察している。表1を見ると、80年代、90年代は日本語母語話者による研究が多かったが、2004年以降は、日本語非母語話者による研究が増えてきていることが興味深い。さらに、調査対象者を見ると、中国語母語話者を研究対象としたものが大多数を占めている。研究方法としては、学習者の作文をデータとした研究、あるいは作文とアンケート調査を併用する研究が多かった。作文データベースまた作文コーパスを利用した研究方法(浅田2007、林2015、劉2015、塚田2017)は、中国語母語話者だけでなく、異なる母語を持つ日本語学習者の習得研究にも応用できるのではないかと考える。

次に、4.2では表1に挙げられた研究を研究の焦点別に概観する。具体的に、副詞指導上の困難点に関する研究を4.2.1、学習者の習得に関する研究を4.2.2、教科書での扱いに関する研究を4.2.3において述べる。調査項目全28項目のうち、13項目が陳述副詞についての研究であり、大関(1993a)で陳述副詞は文末との呼応関係があり習得が困難だと指摘しているため、4.3で取り出して考察する。

4.2 研究の焦点別に見た研究の特徴

4.2.1 言語学的視点から見た副詞指導上の困難点

80年代、90年代の日本語の副詞習得研究は日本語学習者の習得状況より、日本語副詞の文法的特徴そのものに焦点をあてて、学習者に提示する際の注意点や習得の困難点を究明するものが多い。

日本語の副詞は構文的に文末、句末と呼応するのが特徴の一つとして挙げられる。北條(1982)はその構文的特徴に目を向け、教科書の『中級日本語読本』の中から取り出した「状態を表す副詞」(評価、限定の副詞を含む)(延べ語数で1,172語)、「程度の副詞」(延べ語数で33語)、「陳述副詞」(延べ語数で49語)をいくつかの文末、句末の形と照合してその結びつき方

を考察した。副詞の学習では、打ち消し、推量、疑問、質問、仮定、比況の語と呼応する陳述副詞については構文上注意しなければならないが、そのほかの状態副詞などについてあまり構文上の考慮をしていないため、学習上問題が起こることがある。例えば、学習者の状態副詞の使用例として、「その仕事をとうとうやり終えたことで彼ははじめて自信をもった」が挙げられている。この文の不自然さの原因について、北條は「とうとう」は「こと」でくくられる修飾節の中にはおさまりにくいと説明している。「構文的特徴を把握しなければ、学習者が実際にその語を運用することは難しい」と副詞の構文的特徴の重要性を強調したうえ、さらに中級段階で副詞を指導するポイントとして、類義の意味を持つ副詞のそれぞれの語の意味の幅を細かく把握させることと、それぞれの語の構文的特徴をつかませることを挙げていた。

また、大関(1993a)は語用論の観点から日本語学習者に副詞を指導する際の大きな妨げとして言語の形式に現れた呼応・共起・共起制限によるものと、言語の形式に現れない語用論的立場からのニュアンスの2つを挙げた。まず、文末の言語形式との呼応、すなわち言語形式に現れた前提を指導する際に、表現意図と副詞の関係であり、副詞にどの程度表現意図が担わされているかを考慮する必要があると指摘した。例えば、「依頼表現」として「～てください」を導入した延長線上に、「座ってください」を示すとき、「(前が見えないから)すみませんが、座ってください。」という依頼表現と、「どうぞ座ってください」という勧誘表現の区別に注意を払う必要がある。また、現在のところ指導上の盲点になっている言語形式に現れないニュアンスの指導の困難さに関して、大関(1993a)は「母国語に翻訳不可能であるニュアンスを記述することは、困難を極める。文化的な相違から発想すら持ち合わせていないこともある」と述べている。例えば、「やはり/やっぱり」は会話表現において多用される語であるが、教科書等での意味記述では、「あなたと同じように」、「昨日と同じように」、「思ったとおり」、「前と同じように」などの意味を持つ例で示されており、

下記のような「実際の会話で多い日本人一般が共通して持つ価値判断を背景に、和らげ、強調など様々なニュアンスを伴って使われる例は、あまり扱われていない……複雑なニュアンスを伴う副詞は、中級以上では、積極的に示す必要がある」と指摘している。

例：Q「オリンピックどうでした？」

A「やっぱりすごい、やっぱりいいですね。」

大関（1993a）より

日本語学習は学習者にとって常に進化する過程である。同じ学習項目と言っても、学習者のレベルが異なれば、その習得の困難点は変わるだろう。小矢野（1984）は日本語学習歴に基づくレベルの差と教科内容の差を尺度にして、それぞれにおいて指導すべき副用語の指導上の問題点、困難点を指摘した。初級学習者にとって、否定文との呼応という制約、蓋然性に関わる表現者の確信の度合という母語およびそれに基づく考え方の違いから起こった誤りや類義副詞の混同が困難であるが、中級以上の副詞の指導では、理解語・使用語が多くなり、文体上の差（口語的副詞の乱用）や類義語の意味の異同などを理解させることが大きな問題となると指摘している。さらに上級になると、副詞の運用、特に「その文脈の底を流れる場面や状況・話者の心理などが織りなすある特有な条件を踏まえて成り立つ副詞」を正しくとらえることの重要性を強調している。陳述副詞の一群は、特にこの問題と深く関わっている。

4.2.2 学習者の習得状況

前節で述べた困難点は学習者の使用にみられるのかを手掛かりとして、本節では実際に日本語学習者のデータを集め、それに基づいて学習者の習得を考察したものを概観する。データの収集方法別で、4.2.2.1 学習者の作文をデータとした研究、4.2.2.2 その他の調査方法（副詞挿入テスト・音声データ・短文作成問題・選択式問題）を利用した研究の2つに分けてみていく。

最後に各研究が論じた学習者の副詞学習に影響を与える要因をまとめる。

4.2.2.1 学習者の作文をデータとした研究

まず、学習者の作文を利用して、学習者における副詞の全体的な使用傾向あるいは誤用傾向を考察した研究である。劉（2015）は副詞の誤用を脱落、付加、誤形成、混同、位置とその他の6種類に分けている。学習者の使用では、類義語の混同と付加による誤用が目立ったと指摘している。類義語の混同の例として、「もし」と「例えば」、「最も」と「一番」、「ちょっと」と「少し」、「必ず」と「きっと」、「絶対」、「もう」と「既に」、「もはや」、「だんだん」と「徐々に」などの誤用例が挙げられた。類義語混同のうち、意味混同のほか、文体上の混同、いわゆる話し言葉的な語と書き言葉的な語を区別しない誤用が多かった。また、「付加」というのは、使用してはいけないところに使用している誤用である。下記の例は、状態の変化を表す際に副詞ではなく、「～ようになる」の文型を使うのが適切であるところに誤って副詞を用いている例である。

誤：今、中国人は誕生日にだんだん注意します。

正：今、中国人は誕生日を大事に祝うようになり
ました。

その他、「もっとの人々のために」のような格助詞「の」を入れ、副詞「もっと」が体言を修飾する誤用例と「もし～と」のような呼応関係の誤用例も指摘された。

塚田（2017）は日本語母語話者のデータと比較しながら、主に日本語学習者が使った副詞のレベルと種類から考察を行った。その結果、母語話者は、N2・N3レベルの副詞を多用し、加えてN1レベルの副詞も使用していることが判明した。一方、学習者は副詞自体の使用は多いが、N4・N5レベルの副詞と話し言葉の副詞の使用が多いと指摘している。また副詞の種類では日本母語話者のデータには陳述副詞も含め様々な種

類が多く見られるのに対し、学習者データの使用頻度の上位に見られないのは陳述副詞であった。

副詞全体を視野に入れた研究もあれば、下位カテゴリーの一種類に絞って学習者の使用状況を調査した研究もある。例えば、石黒(2004)は漢語副詞、浅田(2007)は多義語副詞、林(2015)は様態的副詞など下位カテゴリーの分析を行っている。

石黒(2004)は中国語母語話者の日本語学習者のレポートを収集し、漢語副詞の使用状況を調査した。漢語副詞は、一般的に書き言葉のような硬い文体に適した性格を持っている漢語名詞とは反対に、くだけた話し言葉に適した文体的性格を備えていることが多い。石黒によると、中国語を母語とする日本語学習者は、書き言葉を使うべき内容の作文の中で漢語を多用してしまい、読者に文体的な違和感を与えることが多い。下に漢語副詞の誤用例を挙げる。

誤用例：しかし、憲法は一国の根本なので、多分修正する制限が相当に厳しい。

まず、虚偽の記載が絶対許されるべきではないと思われる。

当時は、彼らは実に喫煙の弊害が全然わからなかった。

浅田(2007)は『国立国語研究所の作文データベース』を用い、学習者の多義語副詞習得状況を調査した。その中で、呼応表現をもつ副詞のほうが学習者にとって習得しやすいとしている。これは第3章で紹介した川口・佐々木(1996)が述べた日本語母語話者の副詞の習得傾向と似ている。しかし、習得しやすいものか、習得しにくいものかをどのような基準で判断すればいいだろうか。浅田(2007)と川口・佐々木(1996)は「使用頻度」を用いたが、「正用率」、「誤用率」で判断する研究もある。

林(2015)は様態の副詞的修飾成分の学習難易度を明らかにする際に、「単に出現率と正用率という基準で学習難易度を図ることは不十分だ」と主張し、「総合難易度」という概念を提出した。「総合難易度」と

は正用率あるいは出現率だけでなく、正用率と出現率の数値を総合的に合わせた数値に基づいて総合難易度を図るものであるとしている。その計算式は以下の通りである。

$$\text{総合難易度}(\%) = [1 - (\text{正用率} \times \text{出現率})] \times 100$$

林は「総合難易度」に基づき、様態の副詞的修飾成分を習得難易度により4つのグループに分けた。ここでは、紙幅の都合上、列举しない。

4.2.2.2 その他の調査方法を利用した研究

浅田(2008)は、調査対象者に副詞文が成立する場合、どの位置に副詞を挿入させるかというテストにより、調査対象者が副詞の語順をどの程度把握しているかを分析した。調査対象者の語順の理解は全体として高くないことが指摘された。具体的には、程度副詞の語順の制約は比較的よく理解されている。語順が比較的自由な副詞について、主題の前に副詞をおくことができることの理解は低かったが、主題がない文では文頭に副詞を置く誤用も多かった。JFLがJSLに比べて主題の前に副詞をおく答えが多かったと指摘した。学習者の誤用例と正用例を下に挙げる。

誤用例：

- a. 頭がよく痛い時はこの薬が効く。
- b. ちょっと先生の家はこの道を行ったところにある。
- c. もう熱いコーヒーを頼んだのに冷めている。

正用例：

- a'. 頭が痛い時はこの薬がよく効く。
- b'. 先生の家はこの道をちょっと行ったところにある。
- c'. 熱いコーヒーを頼んだのにもう冷めている。

李(2010)は発話データと作文データという2種類のデータを比較しながら、中国語母語話者の日本語学習者の副詞使用状況を調査した。その結果、出現率が

高い「多分」「全然」「ぜひ」の誤用について両データからかなり異なった誤用傾向が見られた。例えば、発話データでは「多分」は過剰使用の現象が多く表れているが、作文データでは文末との共起関係の誤用が多い。「全然」は発話データでは共起関係、母語干渉、過剰使用の誤用が見られるが、作文データでは誤用が1つも見られていない。「ぜひ」は発話データと作文データ両方とも意味と共起関係の誤用が多く表れている。李は両データの誤用傾向が異なった原因について詳しく分析していなかった。

李(2010)と同様に、2種類のデータを利用した研究は他に閻(2013)と胡(2019)がある。閻(2013)と胡(2019)はいずれも学習者の産出能力と理解能力の差異に着目しデータを考察した。閻(2013)は作文データと選択式問題のアンケート調査を利用したが、学習者が作文の中に多く使っている語彙や早い段階で習っている語彙であっても、選択式問題での正答率が高くないと述べていた。一方、胡(2019)は短文作成問題と選択式問題のアンケート調査を用い、中国語母語話者の日本語学習者における多義語「きっと」「必ず」の使用状況を調べた。その結果、選択式問題で正解した回答者の6割が短文作成問題で誤用のある文を産出しているのに対し、短文作成問題で正しく運用できた回答者は選択式問題で8割が選択式問題でも正答している。つまり、選択式問題でよくできていたのに、短文作成問題で運用上誤用のある文を産出している学習者が多い。それは、選択式問題で主に使われる明示的知識が比較的早く発達し、多くの学習者が活用できたのに対し、短文作成問題で必要とされる非明示的知識は十分に活用できなかった学習者、いわゆる、「知っている」「運用できない」学習者が多いのであると述べている。

4.2.2.3 学習者の副詞習得に影響を与える要因

学習者の副詞習得に影響を与える要因は大きく①副詞に内在する要因 ②学習者自身の要因 ③学習環境

の要因の3つに分けられると考えられる。

①副詞に内在する要因は副詞自体の複雑な性格を指している。例えば、4.2.1で言及した日本語の副詞には多義語・類義語が多いこと、構文上の呼応関係を持つものがあること、文体上の差、さらに、複雑なニュアンスなどの点である。

②学習者自身の要因は、ここでは主に学習者の第一言語の転移を指す。今回取り上げた論文のうち、中国語母語話者の日本語学習者を対象に行ったものが多く、90%を占めている。しかし、これらの研究は、劉(2015)が中国語訳と比較しながら論証していた他、ほとんどの研究は中国語による干渉の証拠を示していない。奥野(2003)では、言語転移を調査する際に、「少なくとも、母語が異なる2言語以上を対象とした目標言語運用上の記述」が必要であると述べられており、他言語話者に同じ誤用がないかを確認する必要性が問われている。また、日中副詞対照研究の不足であるが、副詞の数が多すぎるため、日本語と対応している中国語を一つずつ対照分析を行うのが難しいと考えられる。しかし、少なくとも両言語の副詞の性格の差異が分かれば、学習者が誤りを犯す原因を説明する手段の1つとして使えると考えられる。

最後に、③学習環境の要因である。ここでいう学習環境は、学習者に接し、学習者に何らかの影響を与えるものと広く取り扱う。主に、インプットの効果、教師の指導、教科書や辞典の不備を指す。李(2010)は作文データでは誤用が見られず、発話データだけで見られた「全然おいしい」「全然大丈夫」のような副詞「全然」の過剰使用について「学習者がTV番組から会話表現をまねして使用したためだ」と原因を説明している。日本語学習者、特に初級学習者はインプットされたものの正否の判断ができず、まねして使用する可能性が高いと思われる。また、取り上げた論文のうち、教師の指導実態に目を向けた研究は劉(2015)のみである。劉(2015)はアンケート調査を通じて、日本語教師の副詞の指導実態を調査した。その結果をまとめると以下ようになる。まず、副詞の習得が難しいと思う教師もいれば、そうではないと考える教師も

いる。授業の時間が限られているため、副詞の指導は後回しになっている。また、「質問が出たとき、説明する」という声もあった。要するに、教師の副詞に対する認識に関わらず、特別な指導法をしていないのが現状である。それは学習者が誤用を犯す原因の1つと指摘されている。

教科書や辞典で副詞がどのように扱われているのかを考察した研究の概観は次節にゆずることとする。

4.2.3 教科書や辞典における副詞の扱い

学習者の副詞習得に影響を与える要因として、教科書や辞典における説明の不備などがしばしば言及されている(閻 2013、劉 2015、塚田 2017)。ここでは、教科書における副詞の扱いを詳しく考察した研究(大関 1993b、劉 2009、伊藤 2017、金 2019)を紹介する。

大関(1993b)は初級日本語教科書16冊、中・上級日本語教科書8冊から副詞を抜き出し、初級、中・上級教科書で扱われている副詞の特徴をまとめた。初級教科書で取り扱われている副詞は異なり語数208例であった。そのうち、日本の国語教科書の副詞語彙における状態副詞の比率が高いのと異なり、程度副詞と陳述副詞の比率は高いことが特徴である。また、これらの副詞は初級で扱われる文型・文法と一緒に提示されるケースが多く見られたと指摘している。一方、中・上級の教科書は新聞や小説など生のものを使ったものが多いため、出てくる語彙の偶然性が高かった。「もはや」、「いまさら」、「どうせ」、「せめて」など、話し手の感情・心情を反映するような副詞が出てくるようになったと述べている。さらに、「コミュニケーション上重要な役割を果たしている副詞のニュアンスは、現行のテキストではあまり取り扱われていない」と教科書説明の不備を指摘し、「偶然提出するのではなく、意識的に学習項目として提出する必要性」があると主張している。

劉(2009)は中国の大学で広く使われている『新編日語』全4巻に出てくる副詞(69語)の例文282例について、22名の日本語母語話者にネイティブチェッ

クを依頼し、①五つの類義語の中から教科書の副詞が選択されるか否かを問う「適切な副詞の選択」、②教科書の副詞が選ばれなかった場合、なぜ選ばれなかったのか、その理由を「原因表」に基づき選んでもらう「原因探求」の調査を行った。その結果、『新編日語』では、副詞の提示の際、意味的整合性、文法的な共起関係、文体的整合性の面で、例文そのものと副詞との間に齟齬が見られ、それが不自然さの原因になっていると述べている。下は劉が挙げた不自然な例文である。

不自然な例文：

鈴木は今料理の作り方についてどうのこうのと細かく説明しているところです。

今学期習ったものは一応復習しましたから、試験はまず安心だ。

総じていえばあなたの今の能力では、とても彼らに及ばないよ。

その他、読解教科書の読解文を対象に、文章展開における「程度・強意」副詞の現れ方を見た研究(伊藤 2017)、JLPTの公式問題集とJLPTの模擬問題集から、副詞を網羅的に収集し、各レベルのための副詞データベースを構築した研究(金 2019)もある。

4.3 日本語の陳述副詞習得に関する研究

日本語の陳述副詞は話し手の心的態度として捉えられる陳述的側面が強いほど、客観的記述が難しく、使用上様々な呼応関係や呼応制限を有するものも多いため、指導が困難であると大関(1993a)が述べている。さらに、陳述副詞の中には、「きっと」と「必ず」のように類義関係にあるものも存在するため、それらの使い分けは一層難しいと思われる。本節では、まず陳述副詞全体の使用傾向を考察した張(2009)と李(2011)を概観する。次に、個別の陳述副詞に絞った研究として、王(2004、2005a、2005b、2006、2007、2008、2009、2014)、メニバイエヴァ(2005)、中島(2017)を概観する。

4.3.1 陳述副詞全体の使用傾向を考察した研究

張（2009）は135名の中国語母語話者の日本語学習者を対象にアンケート調査・意識調査を行った。意味機能によって陳述副詞を10のグループに分け、グループ間で習得の難易度に差があるのかを探究した。その結果、まず陳述副詞の中でも「推定」を表す一群の陳述副詞が中国母語話者の日本語学習者にとって最も難しいということ、また推定の陳述副詞「どうも」と「どうやら」の使い分けができないことが明らかになった。

李（2011）は中国語母語話者の日本語学習者20名を対象に、使用頻度の高い15個の陳述副詞を用い、文を作らせるという調査を実施し、陳述副詞の誤用傾向を考察し、その原因を探った。調査の結果、誤用傾向に関しては主に3点が見られた。①文末表現と呼応しない傾向 ②意味を混同する傾向 ③呼応関係を誤

用する傾向。また、誤用の原因について2点を指摘している。まずは学習者が日中両言語の副詞を混同すること、そして、教育現場の説明不足にも原因があるとされている。

4.3.2 個別の陳述副詞の使用傾向を考察した研究

表2は王（2004、2005a、2005b、2006、2007、2008、2009、2014）の研究をまとめたものである。王の一連の研究は類義語「きっと」「必ず」に絞って行われた。

陳述副詞の中に類義語が多く、王はそういった類義関係に焦点をあてて認知言語学の観点から、陳述副詞「きっと」「必ず」について多岐に亘って調べた。まとめると、王の研究は主に以下の4つに分けられるだろう。

表2 王（2004、2005a、2005b、2006、2007、2008、2009、2014）による「きっと」「必ず」の習得に関する研究

| 研究 | 調査項目 | 対象者 | 調査方法 | 主な結果 |
|-------|--------------------------|--------------------------|------------------------|--|
| 2004 | 日本語 「きっと」 中国語 “一定” | | 対照研究 | 基本的用法、人称、時制という3点から両語の共通点と相違点を考察した上で、学習者は「きっと」を「意志的用法」で多用している傾向があるのは、“一定”の影響を受けているからであると考察している。 日本語教育への示唆： ・教科書と辞典においての説明を改善すべきである。 ・指導する際に、両語の共通点と相違点を例文で示しながら十分に説明すること。 |
| 2005a | 「きっと」 | | 文学作品から「きっと」の例文を抽出 | 認知言語学の観点から「スキーマ」「拡張」という概念を用い、多義語「きっと」の意味構造を分析した。 ・「事柄が成立することへの話し手の強い思い」は「スキーマ」である。 ・「推量」用法が「プロトタイプ」であり、「意志」「依頼」「確率」は「推量」用法から拡張された用法。 ・「推量」用法を中心に位置付けると、「意志」「依頼」用法はやや周辺、「確率」用法は最も周辺から遠いところに位置づけられる。 日本語教育への示唆： 中国語で対応している“一定”の意味構造が違うため、指導する際に、両語の共通点と相違点を例文で示しながら十分に説明すること。 |
| 2005b | 「きっと」 「必ず」 | NS JFL：中国上級 日本語学習者 | 自由産出教科書・辞書調査 インタビュー | ・「きっと」「必ず」の各用法において、母語話者はそれぞれ「推量」「確率」用法を多く使うのに対し、学習者は「意志」「依頼」用法を多く使う。 ・「きっと」と「必ず」の使い分けは、学習者にとっては難しい。 ・教科書と辞書では、「きっと」と「必ず」はすべて“一定”と訳されていることは学習者の使用に影響を与える。 ・教師からの説明が不十分。 日本語教育への示唆： 日本語「きっと」「必ず」と中国語“一定”の違いを説明した上で、具体的な場面を想定しながら、それぞれのニュアンスを示すのが有効的であろう。 |

| | | | | |
|------|-----------------------------|--|--------------------------|---|
| 2006 | 「きっと」 | NS : 30 名 JFL : 中国上級 30 名 中級 30 名 | 自由産出・ 受容度判断テ スト・翻訳 | ・日本語母語話者にとっては「推量」が「きっと」の典型的な用法であるのに対し、 学習者にとっては「意志」が典型的用法。 ・「きっと」の「意志」「依頼」用法の適用範囲に関する知識が不足、類義語と の意味の境界が不安定。 ・中国語“一定”から影響を受けている。 |
| 2007 | 「きっと」 「必ず」 | | 過去研究 のまとめ | 日本語教育への示唆： ・「きっと」「必ず」及び中国語“一定”のプロトタイプの違いを示すこと ・「きっと」「必ず」及び中国語“一定”の意味構造の違いを示すこと ・「きっと」「必ず」の各用法の使用範囲の違いを説明すること ・「きっと」「必ず」の具体的な例文を示した上で、文脈を理解させること |
| 2008 | 「きっと」 「必ず」 | NS : 30 名 JFL : 中国上級 30 名 中級 30 名 | 自由産出・ 受容度判断 | ・学習者の「きっと」の意味知識において、意志的用法は母語の負の転移を受け ている可能性がある。「必ず」の意味知識では、意志的用法は母語の正の転 移を受けているのに対し、推量、確率用法は母語の負の転移を受けている可 能性がある。 ・学習者は「きっと」「必ず」の境界線について曖昧であり、これらの語の理解 は不安定である。 ・「きっと」「必ず」のプロトタイプの形成にも母語の転移がある可能性がある。 日本語教育への示唆：中国語“一定”のカテゴリー体系から「きっと」「必ず」 の認知体系へと概念を変換する必要がある。 |
| 2009 | 日本語 「きっと」「必ず」 中国語“一定” | | 対照研究 | 「述語とのかかわり」「時制」「人称」「心理的プロトタイプ」から比較： ・「きっと」の心理的プロトタイプ：推量用法 ・「必ず」「一定」の心理的プロトタイプ：意志用法 ・“一定”には時制、述語のタイプ、人称の制限がない ・「必ず」は否定文、過去文、3人称には使えない。 ・「きっと」は文脈により、否定文、過去文に使えるが3人称には使えない。 |
| 2014 | 「必ず」 | NS : 60 名 JFL : 82 名 | 受容度判断 テスト | ・中国語“一定”の知識に依存する傾向 ・習熟度が上がるにつれ、プロトタイプ用法の使用は母語話者に近づく。 |

- ①「きっと」「必ず」の意味構造及び両語の共通点と相違点（意味研究）
- ②「きっと」「必ず」に相当する中国語“一定”の意味構造との対照（対照研究）
- ③「きっと」「必ず」の習得状況及びそれに影響与えている要因（習得研究）
- ④「きっと」「必ず」の教育の現状とより有効な指導法（教育現場の調査）

王のこれら一連の研究の集大成としての博士学位論文の中で、課題として他の言語を母語とする学習者に対する調査も必要であると述べている。

メニバイエヴァ（2005）はロシア語母語話者の日本語学習者を調査対象とし、陳述副詞「きっと」「必ず」「ぜひ」の習得状況を調べた。調査は文法性判断テスト、選択式問題、文の翻訳、文のニュアンスの記述を行っ

た。「きっと」「必ず」「ぜひ」のロシア語訳のバリエーションの中で、共通した訳語があることによって、多くの学習者はこれらの副詞の使用が混乱していることが明らかになった。原因として、母語の負の転移が指摘されている。さらに、「きっと」「必ず」「ぜひ」それぞれに幅広い用法があるが、学習者はそのうちの一部しか理解できていないことを述べている。

王とメニバイエヴァの研究は研究対象が異なるものの、結果としては共通した結果が見られた。それは、学習者の「きっと」「必ず」の習得は、母語の負の干渉を受けたということである。しかし、学習者における「きっと」と「必ず」の習得の難しさは母語の負の干渉を原因とするより、「きっと」「必ず」が日本語の陳述副詞として持っている特徴に習得の難しさの原因があるというのが、よりの確であると考えられないだろうか。

また、中島（2017）は韓国語母語話者の日本語学習者が誘導副詞の文法的理解ができない一因を日本語教科書と文法概説書の不備としている。中島（2017）は談話穴埋めテストを用い、韓国語母語話者の日本語学習者の「かならず」「きっと」「ぜひ」「たしか」「たしかに」の5つの誘導副詞の理解状況を考察した。その結果、以下の4点が明らかになった。①韓国語母語話者の日本語学習者の誘導副詞の選択傾向は、日本語能力レベルの上位・下位群共に、日本語母語話者と変わらない。②韓国語母語話者の日本語学習者は、5つの誘導副詞のいずれも、日本語能力レベルが上がるにつれ文法的理解も進む。③韓国語母語話者の日本語学習者は上級になっても「きっと」「たしか」「たしかに」の文法的理解がされてない。④韓国語母語話者の日本語学習者の「かならず」の文法的理解は日本語レベル上級でなくとも容易であり、「ぜひ」は上級になれば理解が大きく進む。また、学習者の誤用の一因は、韓国で発刊されている日本語教科書に副詞がほとんど取り上げられていないこと、文法概説書にも教室での指導に有益な記述がされていないことにあると指摘した。さらに、今後の日本語教育では副詞の明示的な導入が必要であると提案している。

5. まとめと今後の課題

本稿の目的は、日本語学習者の副詞習得を中心にこれまで行われた研究の調査方法と調査結果から明らかになったことをまとめること、さらに今後の副詞習得研究の方向性を模索することである。そのため、第一言語としての日本語の副詞習得研究に簡単に触れた後、第二言語としての日本語の副詞習得研究を研究方法別で概観した。具体的には、言語学的視点から見た研究、学習者のデータに焦点を当てた研究と教科書分析に関する研究の3つである。各研究の成果から日本語学習者における副詞習得状況を明らかにし、さらに副詞習得に影響を与える要因をまとめた。次に、最近盛んに行われた陳述副詞を対象とした習得研究を検討した。

第二言語習得研究は、母語と外国語の類似点や相違点を明らかにする対照分析研究、学習者の誤用傾向、誤用原因や指導法の改善を検討する誤用分析研究、第二言語学習者の特有の可変的な言語体系を究明する中間言語研究という三つの段階を経てきた（迫田2002）。第4章で見てきたように、この40年近くの間、第二言語としての日本語副詞習得研究もほぼ同じ展開ではないかと思われる。日本語副詞そのものに焦点を当てた研究では、多義語、類義語、構文上の共起関係・共起制限、また母語に翻訳不可能であるニュアンスなど指導の困難点をまとめている（大関1993a）。さらに、日本語学習者の使用あるいは誤用を考察した研究では、学習者の使用において意味混同、文体上の混同、付加、脱落、不適切な使用位置による誤用が多かったことが明らかになった（石黒2004、劉2015、浅田2008、李2010）。これらの研究のほとんどは誤用の原因が母語転移、教科書や辞典の不備にあると指摘している。一方で、中間言語発達という視点から、日本語学習者が副詞について「知っている」が「運用できない」のは、非明示的知識が十分に活用できなかったのであると指摘している研究もあった（胡2018）。さらに、王の一連の研究は認知言語学の観点から、学習者における陳述副詞「きっと」「必ず」の習得について多岐に亘って調べていた。

このように、副詞習得に関する研究を概観した結果、まず中国語母語話者を対象としたものが多いが、習得に与える要因をより精緻に探る上でも、他言語話者を対象にした同様の研究が必要であろう。また、学習者の習得状況を考察した研究では、誤用分析が多かったが、誤用傾向だけでなく、正用・誤用も含めた中間言語全体の発達過程をみていくことも今後の課題と言える。さらに、副詞は語彙であるが、「コミュニケーション上重要な役割を果たして……『さっそく』や『ぜひ』に含意されている評価性、『あいにく』や『実は』などが示している相手への配慮など、用いることにより、話者の態度を表明することになる」（大関1993b）という談話上の働きも持っているため、今後日本語学習者の副詞、特に、「話し手の心的態度として捉えら

れる陳述的側面が強い」陳述副詞の発達過程を見る際 研究も必要であろう。
に、単語レベルだけでなく、文レベルや談話レベルの

注

- 1 Bialystok (1978) は、学習者の中間言語知識体系には明示的知識と非明示的知識の2種類が存在すると述べている。明示的知識は言語形式を意識的に認識するもので、文法規則の宣言的な知識であり、制御的な処理によりアクセスが可能であり、言語による説明が可能である。それに対し、非明示的知識は、言語形式を直観的に認識するもので、文法規則の手続き的な知識であり、自動的な処理によりアクセスが可能であり、言語による説明ができない。

参考文献

- 浅田和泉 (2007) 「日本語学習者作文コーパスにみる多義的副詞の習得について」『熊本大学社会文化科学研究科 2007 年度プロジェクト研究報告』7 号 pp. 79-96 熊本大学社会文化科学研究科
—— (2008) 「中国人日本語学習者の副詞の語順」『熊本大学社会文化科学研究科 2008 年度プロジェクト研究報告』8 号 pp. 37-58 熊本大学社会文化科学研究科
石黒圭 (2004) 「中国語母語話者の作文に見られる漢語副詞の使い方の特徴」『一橋大学留学生センター紀要』7 号 pp. 3-13 一橋大学留学生センター
市川孝 (1976) 「副用語」『岩波講座日本語 6 文法 1』岩波書店
伊藤誓子 (2017) 「読解活動における程度・強意の副詞の扱いについて：日本語中級教科書を対象に」『埼玉大学日本語教育センター紀要』11 pp. 29-37 埼玉大学日本語教育センター
閻慧 (2013) 「中国人日本語学習者における程度副詞の誤用に関する研究」『比較日本文化学研究』6 pp. 26-47 広島大学大学院文学研究科総合人間学講座
奥野由紀子 (2003) 「上級日本語学習者における言語転移の可能性—「の」の過剰使用に関する文法性判断テストに基づいて—」『日本語教育』116 号 pp. 79-88 日本語教育学会
大関真理 (1993a) 「日本語教育の視点からみた副詞」『早稲田大学大学院教育学研究科紀要』創刊号 pp. 1-14 早稲田大学大学院教育学研究科
—— (1993b) 「日本語学習用教科書の副詞語彙」『言語文化と日本語教育』5 pp. 23-34 お茶の水女子大学日本語文化研究会
王沖 (2004) 「日本語陳述副詞「きっと」と中国語語気副詞“一定”との対照研究—日本語教育における陳述副詞「きっと」の指導のために—」『人間文化論叢』7 pp. 325-333 お茶の水女子大学大学院人間文化研究科
—— (2005a) 「陳述副詞「きっと」の意味構造と日本語教育への応用可能性—認知言語学観点から—」『日本認知言語学会論文集』pp. 454-463 日本認知言語学会
—— (2005b) 「中国の大学日本語教育における副詞の指導への考え—「きっと」「必ず」の場合—」『人間文化論叢』8 pp. 259-266 お茶の水女子大学大学院人間文化研究科
—— (2006) 「副詞「きっと」の習得に関する研究—中国人日本語学習における典型的用法から考える—」『日本語教育論集』22 pp. 19-31 国立国語研究所日本語教育センター
—— (2007a) 「認知言語学的視点を取り入れた日本語陳述副詞の意味と習得に関する研究—「きっと」と「必ず」の場合—」『＜対話と深化＞の次世代女性リーダーの育成：お茶の水女子大学「魅力ある大学院教育」イニシアティブ：活動報告書』2007 年度 pp. 133-135
—— (2007b) 『認知言語学的観点を取り入れた陳述副詞「きっと」「必ず」の意味研究』お茶の水女子大学大学院人間文化研究科博士学位論文 未公開
—— (2008) 「中国語を母語とする日本語学習者の「きっと」と「必ず」の意味知識」『日本認知言語学会論文集』8 pp. 607-610 日本認知言語学会
—— (2009) 「日本語「きっと」「必ず」と中国語“一定”との対照研究」『日中言語研究と日本語教育』2 pp. 45-52 『日中言語研究と日本語教育』編集委員会

- (2014)「中国人日本語学習者の陳述副詞「必ず」の習得研究」『知性と創造－日中学者の思考』5 pp. 121-131 日中人文社会科学学会
- 川口良・佐々木泰子 (1996)「日本人と日本語学習者の作文における副詞の発達過程に関する研究」『お茶の水女子大学人文科学紀要』49 pp. 219-238 お茶の水女子大学
- 金英児 (2019)「韓国人学習者のための日本語の副詞の語彙教育に関する研究」『日本語文庫』84 pp. 51-77 日本語文庫
- 小矢野哲夫 (1984)「副用語の指導上の問題点」『日本語教育』52号 pp. 7-18 日本語教育学会
- 小林典子 (1988)「外国人日本語学習者による副用語の誤用：誤用例の分類の試み」『筑波大学留学生教育センター日本語教育論集』3 pp. 29-47 筑波大学留学生教育センター
- 胡娜 (2019)「中国語を母語とする日本語学習者における陳述副詞「きっと」と「必ず」の習得—中間言語知識体系の発達という視点から—」『東京外国語大学日本研究教育年報』23 pp. 36-54 東京外国語大学日本専攻
- 迫田久美子 (2002)『日本語教育に生かす第二言語習得研究』アルク
- スルダノヴィッチ イレーナ・ペケシュ アンドレイ・仁科 喜久子 (2009)「コーパスに基づいた語彙シラバス作成に向けて—推量的副詞と文末モダリティの共起を中心にして—」『日本語教育』142号 pp. 69-79 日本語教育学会
- 田窪行則・益岡隆志 (1992)『基礎日本語文法』くろしお出版
- 田中望 (1983)「日本語教育と談話の研究」『日本語教育指導参考書 110 談話の研究と教育 I』pp. 113-133 国立国語研究所
- 陳毓敏 (2003)「中国語を母語とする日本語学習者における漢語習得研究の概観：意味と用法を中心に」『第二言語習得・教育の研究最前線：2003年版』pp. 96-113 お茶の水女子大学日本言語文化学会
- 張璇 (2009)「陳述副詞の習得上の問題点に関する研究—中国人日本語学習者を対象として—」『教育研究紀要』55 pp. 525-530 中国四国教育学会
- 塚田智冬 (2017)「日本語学習者の作文における副詞の使用状況に関する一考察：上級学習者と母語話者の論述文作文の比較」『日本語・日本文化研究』23 pp. 67-80 京都外国語大学留学生別科
- 中島忍 (2017)「韓国人日本語学習者における誘導副詞の文法的理解と誤用の一因：「かならず」「きっと」「ぜひ」「たしか」「たしかに」を中心に」『日本語文庫』77 pp. 61-80 日本語文庫
- 仁田義雄 (1983)「動詞に係る副詞的修飾成分の諸相」『日本語学・特集 副詞とその周辺』2 pp. 18-29 明治書院
- 北條淳子 (1982)「日本語学習の中級階段における副詞の問題」『木村宗男先生記念論文集』pp. 165-181 早稲田大学語学教育研究所
- 芳賀綏 (1978)『現代日本語の文法』3 教育出版
- メニバイエヴァ・イネッサ (2005)「ウズベキスタン人学習者のための日本語副詞研究—「きっと」「必ず」「ぜひ」を例に一」『日本言語文化研究会論集』創刊号 pp. 119-147 日本言語文化研究会
- 李明姫 (2010)「中国人日本語学習者音声資料を利用した誤用分析—副詞の使用とその誤用傾向について—」『東アジア日本語教育・日本文化研究』13 pp. 161-172 東アジア日本語教育・日本文化研究学会
- 李凌云 (2011)「日本語の陳述副詞の習得について」『東アジア日本語教育・日本文化研究』14 pp. 537-551 東アジア日本語教育・日本文化研究学会
- 林春 (2015)「様態の副詞的修飾成分の学習難易度」『言語コミュニケーション文化』12 pp. 77-90 関西学院大学大学院言語コミュニケーション文化学会
- 劉時珍 (2009)「中国の日本語教科書の副詞的な表現に関する一考察—『新編日語』の中の副詞の例文を通して—」『一橋大学留学生センター紀要』12 pp. 59-71 一橋大学留学生センター
- 劉冬梅 (2015)「副詞の誤用分析と指導法の提案：中国人日本語学習者の場合」『惠泉女学園大学社会・人文学会機関誌』20 pp. 18-43 惠泉女学園大学人文学会